

2023年6月

## 課題本 『星落ちて、なお』

澤田 瞳子/著

文藝春秋

2021年

### ◆◆◆6月の読書会から

先月の課題本『式子内親王』の感想文を読んで出席者それぞれが感じたことを共有することから始めました。先月の本は感想文を書くのが難しいという声もありましたが、提出された感想文を読んで私も書いてみようと思ったら遅れてもいいから書いてみてください、ということをお話しました。本を読んで考えたことなどを記録として文章に残すことが大事だと思います。

今月の課題本『星落ちて、なお』は偉大な絵師河鍋暁斎を父にもつ河鍋暁翠の葛藤、父と子、兄と妹、娘と母、夫と妻など主人公がいろんな立場を通してどのように生きたかを考えさせられる本でした。師匠であり父である暁斎の圧倒的な才能、師に教えてもらったことを継がなければと思うプレッシャーはどれほどだったか、という話ができました。芸術を継承する家に生まれること、歌舞伎やお茶の世界にも話は及びました。

参加者がそれぞれどの登場人物に興味をもったか、ということも話してみると各自の考え、視点が見えて楽しかったですね。

(文責:森下)

### 『星落ちて、なお』を読んで

#### ◆【 K子 】

タイトルの「…なお」には物語のすべてがあると思いました。

偉大な画家を父に持つ娘の葛藤が全編を貫いている。主人公「とよ」の人物像が明治から大正にかけての時代変化と共に、克明に描かれ、女性作家(男女は関係ないですかネ)ならではのきめ細かさが随所に表現されている。(これが素晴らしかった)絵師(画鬼)の父に幼少期から絵のイロハをたたきこまれ、一人前の絵師になっても父を超えられぬ苦は、父の血(絵筋)を継ぐ兄との戦い。頼りに出来ない身内。「とよ」はもっと息を抜いて生きられなかったのか？

偉大な父が覆い被さっても個は別なので自分の道を(絵)をもっと比較しないで描けなかったものか。親娘の血縁はあっても芸術の道では異なる色が流れてもよかったのではと…。人情の機微・絵に対する熱量・娘に対しての母親としての情・すべての事が網羅されている。このことが息苦しさにつながり、どこかに風穴はなかったのか？

父娘で同じ職業についての宿命と言えればそれまでかも知れないが…。主人公「とよ」をもう少しだけ楽しんであげたかったと思いました。

## ◆【TK】

明治時代から関東大震災までの時代のある絵師の家族を小説風にした作品でした。昔の風景、生活、風情を豊かな語彙で表現しています。

最初の章は人物がたくさんでてきてその家族関係ばかりなので、面白くありませんでした。が、どの本も最初の 100 ページはなんなのかしらとおもわせるばかりでそれ以降は展開していき面白さがでてきます。

父親がプロの絵師でそれを倣って引き継いでいくのですが、異母兄弟とかそれぞれの生き方で家族は変化していきました。

プロとか偉大な芸術家の家族は受け継いでいくのにどこまで個性を出すのかどこまで引き継げるのかプレッシャーがあります。例えば日本芸の家元とか歌舞伎とかもです。

厳しく自由も制限され自分で選べることも少ない世界です。食べていき、後の子供に伝えていくのは大変です。

特に芸術は時代の流れの中で変わっていきますし、派もあります。その事もでていました。

更に関東大震災での被害がまるでその時に生きていてニュースを聞いているような感じでよくわかりました。どこの被害が大きくどのように助け合ったのかとかです。

時代と家族、災害は操ることはできませんが、その時その時の良さを見つけて懸命に生きていくのは今も昔も変わりません。

## ◆【T】

稀代の絵師にして画鬼と呼ばれた河鍋暁斎の娘とよ。5 才から父のもとで絵の修行を始めた。絵師として世間には認められたが、父があまりに偉大すぎ、その絵に近づくことも超えることもできず苦悩しながらも絵を描き続けた。彼女は、絵が好きだと思ったことがないという。描いても描いても満足できない、兄にも父にも追いつけない苦しい日々だった。

そんなとよを救ったのは、清兵衛の、「人ってのは結局、喜ぶためだけにこの世に生まれてくる。あの世には何も持っていけない。この世のすべてはきっと、自ら喜び、また周囲を喜ばせられた者が勝ちなんです。」という言葉だった。清兵衛自身も我が子を失ったことから苦しみ、富も名誉も投げ出し、ゑつ(ぽん太)との生活を選んだからこそその言葉だった。

その言葉で自身を振り返ったとよは、幼い時に父から絵を渡された時の胸躍らせた姿を思い出した。その時の喜びには、憎しみ・苦悩はなかった。暁斎がとよに与えたのは絵師の火宅ではなく、火花の如く眩く、澄み切った煌めきだった。

人生の終盤で、やっと父のくびきから解き放たれたとよ。優しい言葉はなかったが父の大きな愛情は感じられたのではないだろうか。そうして、ここまで彼女が絵を描き続けてこられたのは、父に近づきたい、追い越したいという思いからだっただろうなと思った。彼女の前の大きな壁は、「ここまで来い。」という父の思いでもあったのではないだろうか。

## ◆【望月悦子】

この物語は、巻末に書かれていた夥しい参考文献による歴史小説で、現存した著名人を次々登場させているから想像の世界だけでなく現実味をおびた構成となっているから面白い。

幕末から大正にかけて活躍した女流画家の河鍋暁翠を主人公に、画鬼と称された父の河鍋暁斎に対する愛憎半ばする感情を主軸として、兄との確執、江戸っ子堅気な主人公を巡る人間模様、江戸情緒、根岸界隈の環境などなど具体的で今その現場にいるような錯覚さえ覚えるような表現力はさすがだと思えた。折しも日本が近代化をはかる時代において、絵画の世界にも欧米化の波は訪れ、伝統的な技法は廃れていく。今日では各々の宗派の特徴や良さが認められ高く評価されているが、時代の流れにあつては古きより新しきを求める流行には贖われぬ。絵師の娘として、登場する絵師達の栄枯盛衰を見ながら、どのように生きていくか苦悩は耐えなかったのではなかっただろうかと推察する。明治、大正と移りゆく時代背景や出来事も絡め、非常に奥の深い物語となっていた。

今回の物語では2人の人物主人公の「河鍋とよ」と「鹿島清兵衛」に惹かれた。とよの世話好きで駆け引きのない清々しいまでのやさしさとは裏腹に、偉大な父と素質を継いだ兄に対して劣等感に苛まれて内面では随分な苦悩を抱えていた。その彼女に対して清兵衛は「人ってのは、結局喜ぶためにこの世に生まれてくるんじゃないですかね。とよさんもまたその年まで絵を続けているのは、そこに少しなりとも喜びがあったためではないですか。暁斎先生や周三郎さんへの引け目のせいで、ご自身の中にある喜びに顔を背けちゃいませんか(P315)」と諭している。清兵衛自身も4歳の子を失って放蕩に走っただけに、人の苦しみ哀しさは嫌というほど味わっているから「とよ」の内面を推し量ることができるのだと思う。

「星落ちて、なお」の題名は「人は喜び楽しんでいいのだ、生きる苦しみ哀しみとそれは決して矛盾しはしない。むしろ人の世が苦悩に満ちていればこそ、たった一瞬の輝きは生涯を照らす灯となる」と清兵衛に語らせているが、作者の主張したいことはここにあると思った。

しんどい展開の物語ではあったが、おもしろかった。

## ◆【MM】

今月の課題本は父を師匠にもつ女絵師の物語だ。父(河鍋暁斎)は話の序盤で亡くなり、残された兄弟のうちで異母兄の周三郎は口が悪く、とよへの当りはきつい。周三郎もまた父に絵を学んだ絵師である。持って生まれた才能はとよの方があるかもしれないが、兄は人一倍の努力で父の描く世界まで近づこうともがいている人のような気がした。とよは5歳で絵筆を握らせてもらった。しかし周三郎が修業をはじめたのは17歳。この差を埋めたい、師匠に認められたい、才能も父からの期待もとよに追いつき追い越したいと思う姿が想像できる。

先月の課題本ほどではないにしても、今月の『星落ちて、なお』の最後に載っている主要参考文献の量の多さにも目を見張った。今月の本は小説だ。史実や明治から大正にかけての日本美術の特徴、西洋画の手法を取り入れた流派の隆盛、それ以外のものは古くみられ

たり軽くみられたりという時代の流れなど丁寧に描かれていた。登場人物も実在の人物なので美術に詳しくない私は美術史に関する本などを傍らにめぐりながら読んでいった。西洋風がもてはやされたその時流にうまく乗るか、今は亡き師匠が大事にした描き方を継承していくか。周三郎もとよも後者だった。周三郎のように固執すると仕事が減り食べるのに困る。それを助けてくれたのがとよの周りにいた清兵衛のような父の弟子や友人たちだが、人間性に乏しい周三郎にはそのような助けはない。とよは父のやり方を踏襲しつつも、頼まれれば挿絵なども仕事も受けていた。生活していかなければならないからだ。芸術で食べていくのは並大抵のことではないとつくづく思った。

読書会ではタイトルの『星落ちて、なお』とは何を表しているのか、という話になった。「星落ちて、なお〇〇」と続けるなら何かしら、ということ言えば、物語の最後のあたりにあった「彼らの生きた事実はいまだ空の高みに輝き続けている」ではないか、と思った。しかし、感想文を書くときにもう一度読み返してみたらこうも言えるのではないかなと思った。「星落ちて、なお、父の絵から離れられない。父に捕らわれたままだ」。最初の変化だと希望ともとれるが、後者だと苦しみも含まれる。だから暁翠は娘のよしや孫の楠美に「絵を描くな」と言ったのか。(『別冊太陽 河鍋暁斎 奇想の天才絵師』平凡社 2008)

とよは自分が味わった苦しみを子や孫に味わわせたくなかったのかもしれない。そして、同じ芸術の世界で生きるよりも親と子、祖母と孫という関係を大切に生きたいと思ったのかもしれない。